



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常（2）～



松岡園子

それぞれの電話 -13歳-

6月に入ると、雨の降り続く日が多くなった。

ぼわーん、ぼそぼそ、ぼわーん……。

こもったような響くような声が1階から聞こえる日は、起き掛けから黒っぽい霧が2階にまで押し寄せてくるような気分になる。

「ああ…また言うてるなあ……」

ゆりの溜息交じりの声が、部屋に響く。朝起きるとすぐに部屋のドアまで這っていき、そっと開けたドアの隙間から頭だけを出し、1階の物音に耳をそばだてる。そんな習慣がいつの間にかついでってしまった。静まり返った1階の台所の真上あたりの床から、時々、話し声だけでなく、言葉にならない「うぁーなーうー」と呻くような、重低音の歌声も聞こえてくる。

「……暗っ」

ゆりにはその歌が呪いの歌のように聞こえる。朝から呪いの歌が聞こえる家は、きっとうちだけだろう。さわやかな朝、なんていう言葉はうちにはないのだと考えると、朝から悲劇の歌い手になっている夏子の姿を想像しただけで何だか可笑しくなって、ぷっと吹き出しそうになった。

1階に下りていくと、歌声は止まった。台所の引き戸を開けると、夏子が視線を下に向けたまま立っている。

「お母ちゃん、おはよう」

「……」

まっすぐ下を向いたままの視線は、びくりともしない。

(私が入ってきたことには、気付いていない……か)

「お母ちゃん、これ、昨日千恵ちゃんのお母さんがくれたパン」

そう言ってゆりは、戸棚にしまっていた食パンの袋を取り出した。昨日の夕方、家に千恵ちゃんとお母さんが来てくれて、あれやこれやと差し入れをしてくれた。

「焼くよ」

返事がないので、黙ってトースターに食パン2枚を突っ込んだ。

(返事もしてくれへん人と一緒におって、こっちが独り言を言うてるみたいやわ……)

「お母ちゃん、今日はおばあちゃんの納骨やから、亜紀おばちゃんとかも来るよ」

「ん」

久しぶりに親戚一同が集まることになっていた。だからゆりは、3日前に祖母の電話帳から料理屋さんを探して電話をかけ、10人分の法事用の会席料理を今日の11時頃に持ってきてもらうよう手配した。法事用の料理の値段はだいたい3,000円から5,000円ぐらいでと、2年前に祖父の法事の時に祖母が言っていたのを思い出した。今は夏子が仕事のできる状態ではないし、祖母の貯金にも限りがある。だから値段の高いものを注文するには気が引けて、3,000円台のものを注文した。

「えっと、持って帰ってもらうお返しは一家族分でいいから……これでセットOK。あとは、お茶と座布団の準備か」

お客さんをもてなすのって結構好きだなと思いながらゆりは、1階の客間の隅にお返しの入った紙袋を並べた。のしに書いてもらう内容やわからないことは、祖母の友人の真鍋さんに電話をかけて訊いた。今日は、真鍋さんは来ない。1カ月ほど前のゴールデンウィーク中に、夜中に真鍋さんの家へ駆け込み、そのまま泊まらせてもらった。そのことを思い出しながらゆりは、今日来る予定の良二や亜紀が、もし真鍋さんと顔を合わせるようなことがあるとどうなるのだろうと想像して、こめかみの周辺にかつと熱を感じた。

あの後、ゆりが奈良の中学校で関係者と話し合いをした後にあおば園に帰らず、亜紀の家へ帰ってきた日、良二が真鍋さんに電話をかけていた。一晩泊めてもらったお礼を言うどころか「身内で何とかするから、今後、余計なことをしないでほしい」とゆりのいる横できつい口調で話しているのを聞いた。それからというもの、頼っていくと間に挟まれた真鍋さんを追い詰めてしまうような気がして、電話をかけようと受話器を上げてはまた下ろすということが何回もあった。

(大丈夫かな……。真鍋さん、もう私たちのこと嫌になったりしてないかな)

無理やり神戸に戻ってきてから20日余り。学校へは行ってない。今は手続き上、奈良にいることになっているし、急に勝手に神戸の中学校に行っているのかもわからない。あれから何度か亜紀からの電話があったが、「やっぱり無理や」と音を上げることがないか探るような口ぶりで、「何か困ったことはないか」「学校はどうするのか」などと色々と訊ねられた。そのたびにゆりは、「別に」「神戸の学校に行く」と言わなければならなかった。きっと

今日、皆で集まった時に、ゆりたちが今後どうするかの話も出るだろう。だから余計に納骨の集まりで手落ちがあることは許されない。そう気を引き締めながら、お茶を淹れる急須のふたを開け、汚れがないか覗いて中をくまなく確かめた。

隣の部屋では、夏子が手をたたいて歌を歌っているのがすりガラス越しに見える。神戸の家で夏子とふたり。全く平気かと言えば嘘になるが、日々の生活の煩わしさよりも、夏子と一緒に過ごせる安心感の方が優っていた。

「おはようさん」

ゆりが玄関を掃いていると、隣のおじちゃんが通りかかった。おじちゃんはゆりの家の隣で酒屋をしている。おじちゃんの家はゆりの家からさらに坂を下ったところにあるため、家と酒屋の行き来する時、ゆりの家の前を通る。今日は日曜でお店も休みのはずだから、ここを通ったりしないはずなのに……？

「あ、おじちゃん。おはよう。おばちゃんは？」

「うーん。大丈夫や、心配いらん」

「うちのおばあちゃんが入院した時に手伝ってもらいながら、今度はおばちゃんが大変やのに、何にもできんで……」

「いやあ、ゆりちゃんとも大変やろ。おばあちゃん亡くなってから。今日は何かあるんか？」

「今日は納骨やから、8人ぐらいお客さんが来る」

そう説明しながらゆりは、祖母が亡くなったことをおばちゃんに知らせた時に、電柱の陰から何度も何度も頭を下げてお辞儀をしている祖母の夢を見たと話すおばちゃんの姿を思い出した。『ゆりちゃんのこと、どうかよろしくお願いします……』っておばあちゃんに頼まれてる気がしてね」と話す、おばちゃんの声と瞳が震えていた。

先週、いつもおばちゃんがいる時間に回覧板を持って行こうと表の通りから覗いたが、店の中にはお酒を飲みに来ているお客さんが2人で座り、大きな声で笑っているのが聞こえた。おばちゃんの姿はなかった。トラックがないから、おじちゃんは配達に行っているのだろう。夜にもう一度覗くと、おじちゃんがいた。訊くと、おばちゃんは入院しているとのことだった。

「ちょっと疲れただけや。おばちゃん、重たいビールのあれも運んだりしてたしな」

そう言いながらおじちゃんは、店の前に高く積まれた20本入り瓶ビールが入ったプラスチックケースを指さした。大変なのはうちだけではない、とゆりは気の引き締まる思いがした。

10時前になると、親戚が集まり始めた。次第に家の中が慌ただしく、2階への案内、お茶出しと忙しくなってきた。納骨でお墓に行く前の儀式が始まる頃にはその前とは打って変わり、2階の部屋がしんと静まり返った。

(独り言、言わんとしてよ……)

ゆりは夏子を横目で見ながら、ひやひやしていた。夏子もいつもと違ってお客さんがたくさんいることに緊張しているのか、じっと静かに座ったままだ。

ピーンポーと玄関の呼び鈴の音が下の方で響いた。掛け時計を見ると、10時50分を指している。

「あ……、料理屋さんや」

ゆりがこっそりと部屋から出て階段を下り玄関のドアを開けると、料理屋さんが料理やお椀の入った番重と、お吸い物の入った魔法瓶などを軽のワゴンから次々と玄関の絨毯の上に置いていった。それらを台所へ運び、ゆりが2階の部屋へ戻った頃には一連の儀式は終わり、皆で談笑しているようだった。座布団に座り直したゆりは、お茶を用意しようかと考えていた。良二、亜紀の他にも、遠い親戚が集まっていた。ゆりにはあまり馴染みのない人たちだ。

「このところ、ずっと雨続きやったのに。今日は天気で良かったですなあ」

「ほんまに、今年はよう降りますなあ」

会話がふっと途切れて、窓の外で電線に留まったスズメの鳴き声ははっきりと聞こえた。

「……で、どうするんや？」

誰もが一番気になっているが、なかなか言い出しにくいと思って黙っている様子だったところを、良二がここぞとばかりに口火を切った。皆が黙り、視線が自分と夏子に集まるのを感じたゆりは一度、唇を結んだ。

「……ここで住む。だって、おじいちゃんが建てて、ずっと住んできた家で。友達もここにたくさんおるし……この家、誰も住まんようになったら……」

ゆりは下を向いたまま、狭くなった喉の奥から声を吐き出した。訊かれた時のためにと、一生懸命に考えた理由だが、話しているうちにしどろもどろになってきた。

「なっちゃんど、ふたりでは無理やろう、ねえ」

遠い親戚の人たちに同意を求める良二のことを、ずるいと思った。

「何かあってからでは遅いんやぞ」

「別に、何もあらへん。この家出て行ったら、誰も住んでない空き家になってしまう」

「もしな、ゆりちゃん達がここに住まんのやったらな、おじちゃんの息子夫婦たちが代わりにここに住むこともできるで。その時はちゃあんと家を守るから、その心配はいらんよ」

ゆりが顔を上げた時に、細い目をした男性と目が合った。

この人、おばあちゃんの兄弟の――

この人たちはこの家を何やと思ってるんや。おじいちゃんがここにいたら、絶対にそんなことはさせない。この家を愛し、近所の人たちとの関係を大事にして生きてきたおじいちゃんやおばあちゃんの十数年が、簡単に他人のものとしりかわってしまうように感じた。その上、細い目をした男性と良二が目合わせて頷き合うのを見て、さらに怒りに震えた。

「あおば園みたいに住めるところは、神戸にもあるんやで。神戸がいいんやったら、そこに

行くか」

良二は笑っているようにも見えるが、そう言い終わった後の冷たい眼差しがこっちを向いている。ここは祖父や祖母と一緒に大切に守ってきた家だ。夏子にとっても近くに住む小中学生に英語を教え、その成長を見守り続けてきた場所のはずだ。ここに住むことが、なぜ許されないのか。ゆりは、良二の目をまっすぐに見た。

「どこにも行かん。絶対にここで住む」

良二の右手が、勢いよくゆりの襟元をつかんだ。

「こら、ええ加減にしろ！」

部屋中に響いた大きな声と、襟元をつかんでいる手から伝わってくる激しさに、怖いと思ったゆりは熱い蒸気をかけられたように頭の中がぐらりとした。

恐怖にいたたまれなくなっってゆりは部屋を飛びだし、一気に階段を駆け降りた。玄関の下駄箱の上に置いていた、料理屋さんからのお釣りが目につき、それを握って外に出た。家から一番近い電話ボックスが見えると、慌てて震える手でドアを引っ張った。小銭を全部入れ、受話器を取った。数字のボタンを迷いなく押していく。神戸の家に戻ってから、もう暗記してしまうぐらい何回もその電話番号を心の中で繰り返してきた。

プルルル……プルルル——

心臓が迷っている。かけても良いのか、また迷惑にならないか。

「ハイ、真鍋です」

「……………うっ、おばちゃん」

「……ゆりちゃんか？ どうしたんや？」

電話機の中でチャリン、と音がした。

「おじちゃんが……怒って」

足もとを見ると、スリッパのままだった。またチャリン、という音がする。

「……おばちゃんのところに行ってもいい？」

「今からか？ ええけど」

電話はそこで切れた。ゆりは、そのまま駅へ向かった。

電車に乗って2回乗り換える。神戸からでも2時間ほどはかかる。足取りは重かった。宝塚駅から歩く道中も、真鍋さんの困ったような顔が頭から離れない。でもさっきの良二のつり上がった目を思い出すと、皆が帰りそうな時間までは、恐ろしくてとても戻ることなどできない。

家が近づいてくると、庭先で花の手入れをしている真鍋さんの姿が見えた。ちらちらと通りを気にして見ていた真鍋さんは、ゆりを見つけるとすぐに手招きした。

「電話が切れてしもたから、心配しとったんや。電車賃はあったんやな」

そう言われた時に、千円札で切符を買ったお釣りの小銭でまた電話をかけ直すこともできたことに気がついた。

「うん、急に電話してしまっ……」

「今日はおばあちゃんの納骨の日やろ。何かあったんか」

「奈良のおじちゃんが、神戸で住むって言ったら怒って……ここつかんで」

ゆりは、自分の襟元を自分の手でつかんでみせた。他の親戚も見ている前でのことだったのだと改めて思い出すと、頭から背中まですーっと血の気が引き、目のあたりが熱くなった。

「えー、そんなことするか。まあ、腹が立ったんやろうなあ。それは怖かったな」

「そんなことされたことないし」

「そら、ないやろ。あんたのおじいちゃんもおばあちゃんも、そういう怒り方はせえへんかったからな。まあ、入り。あんた、スリッパ履いてきたんか」

真鍋さんの目が少し緩んだ。

「怖かってん。もう靴、取りに帰るんも」

真鍋さんは台所にゆりを案内すると「これ食べ」と言って、お皿に並べて用意してあったおにぎりとお漬物をすすめた。

「ご飯、食べてないんやろ」

ゆりはその時にお昼の会席料理のことや、納骨の車の手配、お返しに持って帰ってもらう紙袋のことを思い出した。誰かがやってくれているのか。お母ちゃんはその後どうしたのか。時計は1時をまわっている。

せっかく朝から用意しておいたのに……と肩を落としたゆりに真鍋さんが優しく言った。

「これ食べたら、家に電話してみ」

プルルル……プルルル——

誰が出るのか、お母ちゃんか、それとも——

「はい、吉田です」

亜紀おばちゃんの声、とゆりは思った。声が震える。

「私、ゆりです」

「ゆりちゃん、どこに行ってるの？ 急に出て行って」

「あの……ちょっと、友達の家。夕方に帰るから。お母ちゃんは？」

「夏子？ 納骨が終わって、今、皆でお昼を食べてるけど」

「お母ちゃんにも、そう言っといってくれへん？ あ、それと客間に、来てくれた人たちに持って帰ってもらうお返しの紙袋を置いてあるから」

手落ちがないように準備をしたのに、これでは抜けたところばかりやと沈んだ気分で受話器を置いた。

「これ、ゆりちゃんに渡そかどうするか、迷ってたんやけど」

真鍋さんは、半分に折りたたんだメモを差し出した。中には電話番号が書かれている。市外局番から大阪のものだとわかった。

「お父さんのいるところ」

えっ、と顔をあげたゆりと真剣な顔をした真鍋さんの目が合った。

「おばちゃんは、ゆりちゃんの為を思って色々やってきた。おばあちゃんと仲良しで、ゆりちゃんが生まれた時からずっと知ってる。だから孫みたいなもんや。そやけど、奈良のおじちゃんたちは、おばちゃんがゆりちゃんになんやかんやしてあげることを、よく思ってないみたいや。おばちゃんちょっと疲れてしもた。一旦、手を離すわ。ゆりちゃん……ごめんな」

やっぱり、とゆりは思った。

「おばちゃんが謝らんでも……。うん、大丈夫。ありがとう」

ごめんな、ごめんな、と真鍋さんは繰り返した。ゆりは何度も首を振った。

「この番号に電話してみる」

奈良や大阪へと帰っていくお客さん達とちょうど入れ違いぐらいで会わなくて済むと思える時間は、4時だった。長時間、夏子をひとりにしておくことも気がかりで、少し早目に出ることにした。真鍋さんは、タッパーに入れたおかずや野菜、娘の瞳さんが「ゆりちゃんに会った時にあげて」と言っていたというワンピースを、大きな紙袋につめて渡してくれた。ゆりが真鍋さんの家を出て曲がり角を曲がるまで、ずっと見ていてくれるのはわかったが、ゆりは振り返ることができなかった。

神戸まで戻る電車の中で、受け取ったメモの数字を何度も見つめては折り畳んだ。お父さんには今まで1回も会ったことがない……。

神戸の家に着き、玄関のドアをそおっと開けた。隙間から靴を確認する。夏子の靴とつっかけ、ゆりの靴しかない。肩からみぞおち、腕が一気にゆるむのを感じた。玄関の上がりかまち框には料理屋さんに返すクリーム色の番重の中に、空っぽのお椀や魔法瓶などがきっちりと並んでいる。家の中は静まり返り、夏子の小さな声が奥の部屋からかすかに聞こえる。

あれからどんな話になったのか。何かしないとこのまま話が進んでいかない。ゆりはポケットから真鍋さんがくれたメモを取り出した。12年間も会わずに過ごしていたお父さんに電話をいきなりかけるなんて、これまで考えもしなかった。本当は、そんなことになりたくなかった。もし会ったとして、お父さんだと思えることができるのかな。

勇気を出して、ゆりは受話器を取った。ひとつひとつ、数字のダイヤルを回していく。

最後の数字あとひとつというところで、3回ほど受話器を置いてしまった。4回目にまた最初からかけ直し、勢いで最後のダイヤルを回した。

プルルル……プルルル——

「はい」

「あの……吉田ゆりといいますが」

「ゆりか」

これまでゆりは、「お父さん」と誰かを呼ぶということがなかったため、「お父さんやで」

と言われた時も、何か違う世界の言葉を聞いているような気がした。お父さんは真鍋さんから事情を聞いたと言って、これまでの大方のことは知っていた。今は、再婚した奥さんとふたりで暮らしているとのことで、その奥さんも電話口まで出てきてゆりと少し話した。

「奈良のおじちゃんの電話番号を教えてください」

ゆりが電話番号を伝えると「またかける」と言って、ガチャリと電話が切れた。

1時間ほどして、電話が鳴った。お父さんは良二の家に電話をかけ、ゆりたちが神戸の家で暮らすことができるように話してくれたようだった。

「条件があるらしいぞ。念書を書いて渡す」

「ねんしょ？」

そんな言葉は聞いたことがなかった。

「約束を証明する紙や、『もう世話にならん』と書いてハンコを押して渡すものや」

頭や肩がわなわなとした不快感に震えた。良二おじちゃんがそんなことを言っているのか。世話にならん、それでいい。何があっても今後一切お世話にならない。世話になんかなるもんか。

「うん、それ書く」

炎のような怒りの熱を背中に感じながらゆりは、祖母の書簡箋をたんすから引っ張り出し、筆を走らせた。

木下 良二・亜紀 様

今後何があっても、一切、お世話にはなりません。

吉田 夏子・ゆり 1993年6月20日

(ふたりでは何もできんと思ってるんやろ。お母ちゃんとふたりでやってやる、見とけよ！
将来、立派になって見返してやる！)

怒りとやっとなつた決着への潔さとが心の中でごちゃごちゃに混ざって、嬉しいやら怒っているやらわからないまま、折りたたんだ念書を封筒につっこんだ。

6月末の金曜日。奈良の中学校に行き、クラスでお別れの挨拶をした。

「短い間でしたが……」

「ほんまに短いなあ」

担任だった沖谷先生が言うと、皆が笑った。クラス全体をぐると見渡すと、千紗や皆が笑顔でこっちを見ている。この学校に通ったのは3週間ほどだった。そんなに短い時間だったとは思えないほど、たくさんの思い出があるような気がした。

「私も神戸で頑張ります。みんなも元気で頑張ってください」

その日の夕方、あおば園にも行き事務所で挨拶をした。

「お世話になりました」

「色々大変やと思うけど、元気でな」

施設長さんも、もう戻って来いとは言わない。

「ゆり姉ちゃん、どこ行くん？」

部屋の荷物を片付けだしたゆりに、小学生の子たちが集まってきて訊いた。

「うん、違うところに行って暮らすことになったん。みんなも元気でね」

愛にもひとこと言っておきたかったが、ゆりが荷物をまとめるために部屋に行くと、部屋にいた愛は何も言わずに出て行ってしまった。ゆりの机の上には以前、ゆりが貸した『魔女の宅急便』の本がきっちりと積まれている。その一番上の1巻のページからはみ出す、写真のようなものに目が留まった。引き抜いてみると、ゴールデンウィークにあおば園の皆で吉野川に行った時の写真だとわかった。女子全員で写る写真の中に、愛もゆりもいる。その裏に、文字が見えた。

がんばりや。まけるな！ あい

部屋の外で、「愛、手伝ってえ」と食堂のドアを開けて呼ぶ声がした。声のした方へ行くと、食堂横の畳で寝そべって雑誌を読んでいる愛の姿が見えた。ゆりは愛の横まで行き、写真を手を持って言った。

「愛ねえちゃん……これ」

愛は、雑誌に目を落としたままだった。

「布団の中で、泣いてばかりしやんときいや」

「うん……お世話になりました」

7月の初旬、中学校の先生2人が家に訪ねてきた。そのうちの1人の先生が「5組担任の小泉です」と名乗った。夏子と玄関で先生たちを出迎えたゆりは、準備物や手続きのことができるだけ聞き漏らさないように、神経をとがらせていた。

(今までのこと、先生達はどこまで聞いてるんやろう)

先生達は夏子に向かって話す。当たり前か、と思いながらゆりは、体操服やカバンなど準備するものをあれこれ考えていた。夏子もうつむき加減ではあるが、「はい、はい」と返事をしてくれている。

「さっそくやけど、この中の書類書いて、来週持ってきてもらえますか」

小泉先生はそう言って大きな封筒から中身を取り出し、説明した。家庭調査票と書かれた紙や、制服屋さんのカタログなどが入っていた。ゆりは先生達が帰るとすぐに、家庭調査票を大人のものに見えそうな字で丁寧にした。そして夏子と一緒に制服屋さんへ行き、中学校の制服や体操服を注文した。夏子が店員さんと話すことはないが、ゆりだけで行くわけにもいかない。ひとりで行くと「お父さんかお母さんは？ 一緒に来てね」と怪しまれたり、

話を通してもらえない。

あと 10 日ほどで夏休みという月曜日の朝、神戸の中学校で転入生として挨拶をすませると、同じ小学校だった友達がたくさん集まってきた。近隣の小学校 4 校から生徒が集まっている中学校だから知っている子は半分以下のはずだが、初日から「よっしー、久しぶり」と、気安くあだ名で呼んでくれる友達がいることにゆりは安心感を覚えた。

次の日の朝、夏子は朝から調子が悪そうだった。朝ごはんを食べずに「しんどい」と言っている夏子の相手をしている内に、学校が始まる時間になってしまった。

「しんどかったら、寝といてね。熱とか出てきたら、病院行ける？ それか、私が帰ってくるまで待っててね」

そう言い残して、学校へと急いだ。1 時間目の授業は始まっていた。2 日目から遅刻かあ、でも仕方ない。休み時間に小泉先生が遅刻の理由を聞きに来たため、「お母さんの調子が悪くて」とだけ伝えた。熱や咳が出るような病気なら、病院へ行って薬をもらう。体が元気でも、独り言を言っているだけで病院に行くのだろうか。それが病気なのかどうかがわからなかった。亜紀おぼちゃんは病気だと言っていたけど、それ以上詳しいことは何も聞いていないし、よくわからないとゆりは思った。

土曜日の朝、ゆりが起きると、部屋の横にある廊下に面した押し入れの前で、がたがたと音がしていた。すりガラスの入った引き戸の向こうに、動く夏子の姿が見える。しばらく眺めてから引き戸を開けると、珍しく機敏に動く夏子の後ろ姿があった。廊下には、古そうなアルバムが散乱している。その横には、英語で書かれた手紙、今よりもぐんと若そうに見える夏子と外国の人が一緒に写っている写真が沢山あった。

「これ、お母ちゃんの若い時？ どこに行った時の？」

「……のよ」

「……え？」

「捨てるのよ」

「え、なんで……？」

ゆりが夏子の手許を見ると、同じ外国の女性と写った写真だけが 10 数枚握られていた。その中の 1 枚に、ピンク色の浴衣を着た 20 代ぐらいの夏子と、青くて大きな花模様の浴衣を着た外国人の女性が仲良さそうに写っているものがあった。写真の中からふたりの声が聞こえてきそうなほどよく笑っている、お洒落な女性たちという印象だった。今の夏子がこんな笑顔になることがかつてあったなんて。夏子が 20 代ぐらいということは、20 年前の 1970 年代のものか。

「なんで？ 思い出の品と違うの？」

ゆりは泣きそうになった。

「仲良かった人と違うの？」

「Mary が写ってる写真は全部捨てる」

「……なんで？」

ゆりの見た夏子の目は鋭く勢いがあり、とても捨てるのを止められそうな感じではなかった。ゴミ箱の中は写真だけでなく、Mary からと思われる手紙でいっぱいになった。

なんで今頃……？

夏子はアルバムにあった写真や手紙をゴミ箱行きとそうでないものに分け終わると、1階に勢いよく下りて行った。ゆりは、ゴミ箱の中に捨てられた写真を拾い、浴衣姿の写真だけは、こっそりと自分の机の引き出しにしまった。

2階と1階を結ぶ階段は祖母がいた頃とは違い、日を増すごとにゆりの中学校のプリント、服などが雑然と積まれた物置になってきている。玄関の上がりかまち框も、祖母がいた頃にはそこに腰かけてお客さんと話す場所だったが、今ではそこにゆりの中学校指定のカバンや教科書類が陣取っている。その奥の廊下の両側に物が散乱し、日が経つにつれ積み重なっていった。一度物を置く場所になってしまうと、下の方には何があったのかもわからなくなる。

ゆりは土曜日だからゆっくりできるけど、と考えながら朝ごはんを準備しようと1階へ下り、台所を覗いた。夏子の調子が日によって違うことがわかってきたが、少しでも独り言が聞こえない時間が長くあると、もう「そういうこと」はなくなったのではないかと大きな期待が膨らむ。しかし、忘れた頃に合わないタイミングで「エッ…違う違う」「ハイハイハイ……」などという声がゆりと夏子との会話をさえぎる。ゆりはそんな時、自分が無視されたように感じる。

「お母ちゃん！」

と言ってこちらに呼び戻すと、夏子は一瞬ハッとするが、ゆりとは視線が合わずまた誰かと話し始める。ゆりは、ハアッ…と夏子にも聞こえるように大げさな溜息をつくが、もう夏子の心はゆりの姿が見えていないようにどこか遠くへ行ってしまう。夏子の相手が自分より優先される存在であることが、ゆりを負けたような気にさせ、行き場を失ったその気持ちをどこにぶつければ良いのかがわからなくなった。

月曜日。毎日、朝に中学校のお弁当を作る余裕はない。だから、中学校に行く途中でパン屋さんに寄ってパンを2つと飲み物を買うことにした。時間がなくてパン屋さんに行けなかった時は、購買のパンを買う。自分と夏子の朝ごはんには食パンとバナナを用意し、お昼に夏子が食べられそうな焼きそばをテーブルに置いて、身支度を整え学校に出かける。

「お母ちゃん、お昼これ食べてね」

「……」

焼きそばは昨日夕方遅くに行った生協で、半額になっていたものだ。鍵をかける前に、一応「行ってきまーす」とひとりで言った。夏子のことは気になるけれど、勢いで外に出たらまた違うゆりの世界が待っている。

坂道を上ったところにある、どんぐりの木のふもとへと急ぐ。半分くらい坂を上り切ったところで、高く結んだポニーテールの髪を揺らしながら駆けてくる林さんの姿が見えて、ゆりは手を振った。学校と一緒にいこうと誘ってくれてから今日で3日目になる。ここから中学校までの15分ほどの道のりが、ゆりにとって中学生に着替えるための花道のようなものだ。一気に頬がゆるむ。

「お母ちゃんが一、今日も何か歌、歌ったわ…」

「へえー、なあなあ、前の、ハハさんのあの歌、歌ってーやー」

「あねさんかぶり？」

「そおそお」

ゆりは、オホン、と咳ばらいをひとつして歌いはじめた。

「いあねさーんかーぶりがーみーえなーいか えんやーとお まわーしーてえー ルル
ルーン おーくれーよー おーくれやっしやー おーくれやっしやー ぷっ…ふはっ、
あーっはははは、お腹いたいー」

林さんは、笑いで体をくねくねさせて、「おーくれやっしやー」の後に、「おーくれ」「おーくれ」と合いの手を入れる。

「はっははは、ひー、ほんまにおもしろいな、ハハさん。今度、生で聴きたい」

「あーもう、涙出てきた」

「なあゆりちゃん、今日、誕生日やろ」

そう言って林さんが、カバンの中から赤い包装紙に金色のリボンがついた包みを取り出した。

「わあー、ありがと。13歳かあ。開けてもいい？」

今日は私の誕生日か、家ではそんな会話しなかったとゆりは思った。包みを留めているシールは、昨年までは夏子ともよく寄った、駅前の雑貨屋ベルルのものだった。シールを外すと、中から水玉模様のタオルハンカチと、同じ模様のシャーペンが見えた。

「わあ、ベルルで買ってくれたんやあ。かわいい」

「うん、このごろ行ってへんって言っとったやろお。夏休みに一緒に行こ」

少しはにかんだような林さんの横顔が優しかった。

1学期の終業式の日。式を終えていつもより早目に帰ったゆりが玄関のドアを開けると、夏子の靴がなかった。

「お母ちゃん……？ あれ、買い物かな」

台所のドアを開けるが、誰もいない。ホワイトボードに目を移した時に、いつもは書かれていない文字がたくさん書いてあるのに気付いた。

ゆりちゃんへ

東京の靖国神社に行きました。すぐ帰ってきます。

「え、東京？ 靖国神社って！」

すぐに林さんに電話をかけた。林さんはそれを聞くと、家にいたお母さんに相談してくれた。

「うちの母さんが、夕方ぐらいまで待ってみいって言っとお」

「うん、わかった。もし、帰って来んかったら？」

「帰って来んかったら……」

受話器の向こうの林さんの後ろの方で、「泊まりに行つてあげえ」という声が聞こえた。

東京への行き方は知っているのだろうか。本当に行つてしまったのか。もし、事故にでもあつたら？ 心臓が落ちつかない。

明日から夏休みという時期で日が長くなつている。6時ごろでもまだ明るい。ゆりは、暗くなつてきてひとりだったら心細いなと思ひ、玄関の電気をつけに行つた。台所に戻ると、電話が鳴つた。ゆりはすぐに駆けていき、勢いよく受話器を取つた。警察からだつたらどうしようと思ひ、頭をよぎつた。向こうからは聞いたことのない女性の声とする。

「ゆりちゃん？ 私は東京に住んでいる、あなたのお母さんの友人です。今日は家に泊まつてもらふから、心配しないで。明日、靖国神社に行つてから帰るそうよ」

「え……お母ちゃん、一緒にいてくれるんですね。よかつた」

「今日は疲れたみたいだから、もう寝てもらつたけどね。学生時代のこと思い出して、懐かしいわ」

「あ、よろしくお願ひします」

「ええ、神社も一緒に行くからね。心配しないで。あなたは大丈夫？」

「私は、友達が泊まりに来てくれるから大丈夫です」

「そう、じゃあ、何かあつたら電話してね」

ゆりは女性の言う電話番号をメモにひかえ、受話器を置いた。ああ、よかつたと思ふと体中の力が抜けて、その場に座り込んでしまつた。それにしても、夏子の原動力は何なのか。ゆりは何か、思い違ひをしていたように感じた。東京まで行つて友達に連絡をして、急に泊めてもらうことができるなんて。

話がかみ合わなかつたり、独り言を言つて相手を困らせたりしていないのかな。電話の女性は優しそうな話し方だつたから、病気のこともわかつてくれているのかもしれない――

しばらくぼーっとしていると、電話が鳴つた。出ると、林さんだつた。

「どうなつたー？ 父さんも泊まりに行つていいつて言つてくれたから、行こか？」

「お母ちゃん、やっぱ東京に行つてたわ。さっきな、東京のお母ちゃんの友達から電話があつた。明日帰つてくる」

「じゃあ、お風呂入つてから行くわー。お泊り会やなつ」

1 時間ぐらいいして、旅行カバンを抱えた林さんが来てくれた。「母さんから」と言って手渡された紙袋には、温かいおにぎりとコロッケが入っていた。寝る前になっても話が尽きることはなく、あれこれ2人で盛り上がった。

「なあなあ、見てこのポスター」

林さんは、雑誌の付録についていた、ジャニーズのポスターを広げてみせた。

「うわっ、大きいなあ。これ部屋に貼ったりするん？」

「もちろんやん、毎日見てたいからなあ」

そう言うてうっとりしている林さんを見ながらゆりは、お母ちゃんのこともあるけど、こういう話をしているのが楽しくて、それが自分の周りにあることが嬉しいなと思った。

次の日の夕方、夏子は帰ってきた。

「お母ちゃーん、急に遠くにいったら心配するやん。神社、行けたん？」

「ごめんねえ」

いつになく気分の良さそうな夏子を見て、ゆりも少し嬉しくなった。本当に無事に帰ってきてくれてよかった。

それから朝起きて、まず耳をそばだてるのは変わらない。

ぼわーん、ぼそぼそ、ぼわーん……。

やっぱり、この声に反応してしまう。でも、以前と少し変わったことがある。それは、ちよっと面白い部分を見つけることができるようになったこと。お母ちゃんの歌う歌は面白い。急に大胆なことをするのも、見方によっては面白い。

ゆりは夏子の声に、少し明るいものを感じ始めていた。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。